

VIII 学内連携事業

学生の日本語運用能力の育成には、全学日本語教育部門がカリキュラムを用意し、それを学生が受講することのみで果たし得るものではない。包括的・持続的な取り組みを展開するためには、学内教育組織等との問題意識の共有や、協力連携体制が不可欠である。

本章では、こうした取り組みの一環として、高大連携推進委員会、図書館、大学院との連携・協力事業の概要およびその成果を報告する。

1. 高大連携推進委員会との連携 (小倉 齊)

- 1-1) 愛知淑徳大学 日本語基礎ワークブック
- 1-2) 新入生アンケート 学習調査票
- 1-3) 大学生版学習力調査 国語
- 1-4) 18歳からの実践日本語表現

2. 図書館との連携

- 2-1) 愛知淑徳大学図書館〈書評〉大賞 (外山敦子)
- 2-2) 文献探索ミニ講座 (入口 愛)
- 2-3) 授業サポート (入口 愛)

3. 大学院との連携

- 3-1) ライティング科目の開設 (外山敦子)
- 3-2) 「文化論特殊講義Ⅰ(特論A)」実施報告 (外山敦子)
- 3-2) 「文化論特殊講義Ⅱ(特論B)」実施報告 (小倉 齊)

1. 高大連携推進委員会との連携

1-1) 愛知淑徳大学 日本語基礎ワークブック

高大連携推進プロジェクトの一つとして高大連携推進委員会で企画し、全学日本語教育部門が協力して実施しているものである。

〈専願制推薦入学試験による入学生向けプロジェクト〉

専願制推薦入学試験（AO入試Ⅰ・Ⅱ、クラブ推薦入試・指定校制推薦入試）による入学予定者への入学前課題として「日本語」のドリル式問題集を編集（「英語」も本学全学英語教育運営委員会編集のものを用意）し、送付。

- ① 12月中旬、入学予定者に対しドリル式問題集および提出要領を送付。12月中旬、提出要領および指導依頼文書を高等學校長向けに送付。

なお、2010年度は『やってみればおもしろい！大学生のための日本語再発見ドリル』（旺文社）を使用。2011年度から、本学独自教材『愛知淑徳大学日本語基礎ワークブック Training Basic Japanese Skills』（編集：愛知淑徳大学全学日本語教育部門、発行：学研教育みらい、学力開発事業部）を使用（図VIII-1～4）。

② 翌年3月（2次納金時）、ドリル式問題集の「解答用冊子」回収（郵送による）。

③ 翌年（新年度）4月～5月、採点・添削・コメント記入（学研教育みらいに委託）。

④ 翌年（新年度）5月中旬～6月上旬、面談時にアドバイザーより返却。

1-2) 新入生アンケート 学習調査票

高大連携推進プロジェクトの一つとして高大連携推進委員会で企画し、全学日本語教育部門が協力して実施しているものである。

- ① 4月（ガイダンス時）、「新入生アンケート [学習調査票]」（表VIII-1）実施。
- ② 集計結果のデータ化。
- ③ 学生指導上必要な情報を学生カルテにアップロード。掲載項目は、高校時代の学習状況・読書体験・大学への進学理由・本学への進学理由・大学入学後力を入れたい活動・大学生活への不安・大学卒業後の希望進路など。
- ④ アドバイザーヘの資料提供。
- ⑤ 5月中旬～6月上旬→学生カルテ新入学

表VIII-1 新入生アンケートの概要

調査名称	新入生アンケート
業者名	株式会社ベネッセコーポレーション
調査内容 (一例)	<ul style="list-style-type: none">・大学に進学した理由・現在の大学を選んだ理由・現在の大学および学部の志望順位・大学生活で力を入れたい活動・大学の授業に期待すること・高校時代の学習習慣・高校時代1ヶ月に読んだ本の数・大学卒業後の進路
回答方法	選択式、59問
回答時間	15分

生情報を利用しての面談実施（4月末までに〔学習調査票〕質問冊子を添えてアドバイザーへ依頼）。

1-3) 大学生版学習力調査 国語

高大連携推進プロジェクトの一つとして、高大連携推進委員会で企画し、全学日本語教育部門が協力して実施しているものである。

- ① 4月（ガイダンス時）→45分のプレスメントテスト実施。
- ② 成績のデータ化。
- ③ 学生の個人成績を本人宛送付・学生カルテへの情報アップ。
- ④ 4月末までに「大学生版学習力調査 国語」問題冊子を添えて、学生カルテに成績がアップされた旨を知らせ、面談に活かしていただくよう依頼。
- ⑤ 成績結果はおもに「日本語表現T1」（全学必修基幹科目）での指導に活かすこととしている。

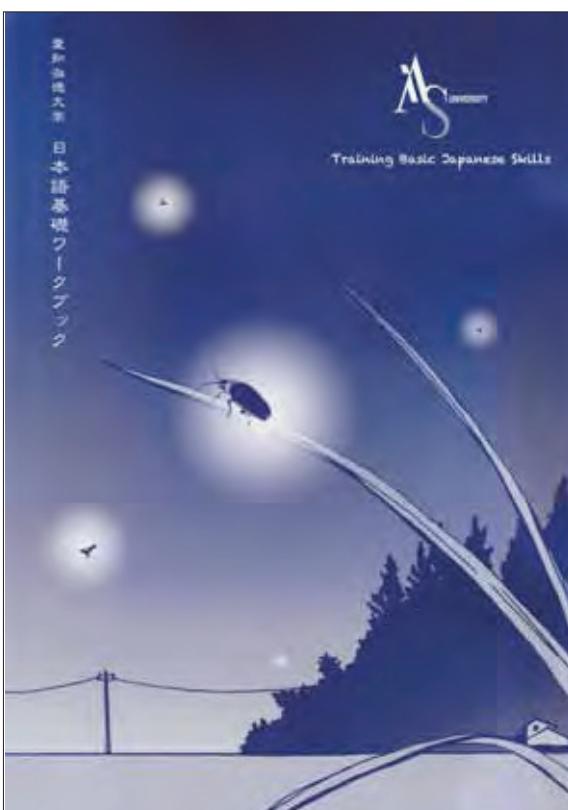
なお、調査の内容および結果の分析は、「IV 学力測定」を参照のこと。

1-4) 18歳からの実践日本語表現

高大連携推進委員会が企画・運営する高大連携推進プロジェクトの一つである。愛知淑徳大学と愛知淑徳高等学校との「高大連携推進」に関する協定により、愛知淑徳高等学校からの指定校制（内部）推薦入学試験・アドミッションズオフィス入学試験Ⅰ・アドミッションズオフィス入学試験Ⅱによる入学予定者を、高大連携特別科目等履修生として受け容れ、愛知淑徳大学の指定する授業科目を履修させるものである。授業は、3月中旬に90分1コマの授業を1日3コマ、5日間、合計15コマ開講する（シラバス：表VIII-2 参照）。授業担当者は、1日目を高大連携推進委員長兼全学日本語教育部門長と高大連携推進委員の教員で担当。2日目から5日目までを全学日本語教育部門の教員4名が担当している。入学前に大学の授業や単位制度などに慣れさせるとともに、大学での授業に必要なアカデミックリテラシーとも言うべき日本語運用能力を実践的に身につけさせることを目指している。

なお、この授業は、健康医療科学部医療貢献学科言語聴覚学専攻及び視覚科学専攻に限り自由科目、それ以外の学部・学科（専攻）においては選択必修科目として扱われ、成績評価で合格した場合に2単位の修得が認められる。

▶ VIII 学内連携事業



図VIII-1 『愛知淑徳大学日本語基礎ワークブック』表紙

日本語基礎ワークブック Training Basic Japanese Skills	
C O N T E N T S	
目 次	
1. 漢字の書き取り①(初級)	2
2. 漢字の書き取り②(中級)	4
3. 漢字の読み取り①(初級)	6
4. 漢字の読み取り②(中級)	8
5. ことばの意味用法①(初級)	10
6. ことばの意味用法②(中級)	12
7. 表現技術①(文と文章の組み立て)	14
8. 表現技術②(わかいやすい文)	17
9. 表現技術③(ことばの選択)	20
10. 文章説解①(主題の把握)	22
11. 文章説解②(論理の把握)	26
12. 文章説解③(要旨の把握)	29
13. 文章要約①(初級)	32
14. 文章要約②(中級)	38

図VIII-2 同ワークブック 目次

表現技術① 〈文と文章の組み立て〉

このセクションでは、文と文章の組み立てについて学びます。文と文章の関係、文の中での主語、述語、形容詞の働きなどを理解し、文と文章の構成要素を理解します。

問題

1. 漢字の書き取り①

2. 漢字の書き取り②

3. 漢字の読み取り①

4. 漢字の読み取り②

5. ことばの意味用法①

6. ことばの意味用法②

7. 表現技術①

8. 表現技術②

9. 表現技術③

10. 文章説解①

11. 文章説解②

12. 文章説解③

13. 文章要約①

14. 文章要約②

評価の記録

單元	評価
1. 漢字の書き取り①	<input type="checkbox"/> 習得 <input type="checkbox"/> おおむね習得 <input type="checkbox"/> やや習得不足 <input type="checkbox"/> 習得不足
2. 漢字の書き取り②	<input type="checkbox"/> 習得 <input type="checkbox"/> おおむね習得 <input type="checkbox"/> やや習得不足 <input type="checkbox"/> 習得不足
3. 漢字の読み取り①	<input type="checkbox"/> 習得 <input type="checkbox"/> おおむね習得 <input type="checkbox"/> やや習得不足 <input type="checkbox"/> 習得不足
4. 漢字の読み取り②	<input type="checkbox"/> 習得 <input type="checkbox"/> おおむね習得 <input type="checkbox"/> やや習得不足 <input type="checkbox"/> 習得不足
5. ことばの意味用法①	<input type="checkbox"/> 習得 <input type="checkbox"/> おおむね習得 <input type="checkbox"/> やや習得不足 <input type="checkbox"/> 習得不足
6. ことばの意味用法②	<input type="checkbox"/> 習得 <input type="checkbox"/> おおむね習得 <input type="checkbox"/> やや習得不足 <input type="checkbox"/> 習得不足
7. 表現技術①	<input type="checkbox"/> 習得 <input type="checkbox"/> おおむね習得 <input type="checkbox"/> やや習得不足 <input type="checkbox"/> 習得不足
8. 表現技術②	<input type="checkbox"/> 習得 <input type="checkbox"/> おおむね習得 <input type="checkbox"/> やや習得不足 <input type="checkbox"/> 習得不足
9. 表現技術③	<input type="checkbox"/> 習得 <input type="checkbox"/> おおむね習得 <input type="checkbox"/> やや習得不足 <input type="checkbox"/> 習得不足
10. 文章説解①	<input type="checkbox"/> 習得 <input type="checkbox"/> おおむね習得 <input type="checkbox"/> やや習得不足 <input type="checkbox"/> 習得不足
11. 文章説解②	<input type="checkbox"/> 習得 <input type="checkbox"/> おおむね習得 <input type="checkbox"/> やや習得不足 <input type="checkbox"/> 習得不足
12. 文章説解③	<input type="checkbox"/> 習得 <input type="checkbox"/> おおむね習得 <input type="checkbox"/> やや習得不足 <input type="checkbox"/> 習得不足
13. 文章要約①	<input type="checkbox"/> 習得 <input type="checkbox"/> おおむね習得 <input type="checkbox"/> やや習得不足 <input type="checkbox"/> 習得不足
14. 文章要約②	<input type="checkbox"/> 習得 <input type="checkbox"/> おおむね習得 <input type="checkbox"/> やや習得不足 <input type="checkbox"/> 習得不足

採点者からの一言コメント

(採点者)

図VIII-3 同ワークブック 問題(例)

表現技術① 〈文と文章の組み立て〉

このセクションでは、文と文章の組み立てについて学びます。文と文章の関係、文の中での主語、述語、形容詞の働きなどを理解し、文と文章の構成要素を理解します。

問題

1. 漢字の書き取り①

2. 漢字の書き取り②

3. 漢字の読み取り①

4. 漢字の読み取り②

5. ことばの意味用法①

6. ことばの意味用法②

7. 表現技術①

8. 表現技術②

9. 表現技術③

10. 文章説解①

11. 文章説解②

12. 文章説解③

13. 文章要約①

14. 文章要約②

評価の記録

單元	評価
1. 漢字の書き取り①	<input type="checkbox"/> 習得 <input type="checkbox"/> おおむね習得 <input type="checkbox"/> やや習得不足 <input type="checkbox"/> 習得不足
2. 漢字の書き取り②	<input type="checkbox"/> 習得 <input type="checkbox"/> おおむね習得 <input type="checkbox"/> やや習得不足 <input type="checkbox"/> 習得不足
3. 漢字の読み取り①	<input type="checkbox"/> 習得 <input type="checkbox"/> おおむね習得 <input type="checkbox"/> やや習得不足 <input type="checkbox"/> 習得不足
4. 漢字の読み取り②	<input type="checkbox"/> 習得 <input type="checkbox"/> おおむね習得 <input type="checkbox"/> やや習得不足 <input type="checkbox"/> 習得不足
5. ことばの意味用法①	<input type="checkbox"/> 習得 <input type="checkbox"/> おおむね習得 <input type="checkbox"/> やや習得不足 <input type="checkbox"/> 習得不足
6. ことばの意味用法②	<input type="checkbox"/> 習得 <input type="checkbox"/> おおむね習得 <input type="checkbox"/> やや習得不足 <input type="checkbox"/> 習得不足
7. 表現技術①	<input type="checkbox"/> 習得 <input type="checkbox"/> おおむね習得 <input type="checkbox"/> やや習得不足 <input type="checkbox"/> 習得不足
8. 表現技術②	<input type="checkbox"/> 習得 <input type="checkbox"/> おおむね習得 <input type="checkbox"/> やや習得不足 <input type="checkbox"/> 習得不足
9. 表現技術③	<input type="checkbox"/> 習得 <input type="checkbox"/> おおむね習得 <input type="checkbox"/> やや習得不足 <input type="checkbox"/> 習得不足
10. 文章説解①	<input type="checkbox"/> 習得 <input type="checkbox"/> おおむね習得 <input type="checkbox"/> やや習得不足 <input type="checkbox"/> 習得不足
11. 文章説解②	<input type="checkbox"/> 習得 <input type="checkbox"/> おおむね習得 <input type="checkbox"/> やや習得不足 <input type="checkbox"/> 習得不足
12. 文章説解③	<input type="checkbox"/> 習得 <input type="checkbox"/> おおむね習得 <input type="checkbox"/> やや習得不足 <input type="checkbox"/> 習得不足
13. 文章要約①	<input type="checkbox"/> 習得 <input type="checkbox"/> おおむね習得 <input type="checkbox"/> やや習得不足 <input type="checkbox"/> 習得不足
14. 文章要約②	<input type="checkbox"/> 習得 <input type="checkbox"/> おおむね習得 <input type="checkbox"/> やや習得不足 <input type="checkbox"/> 習得不足

採点者からの一言コメント

(採点者)

図VIII-4 同ワークブック 解答用冊子裏表紙

表VIII-2 高大連携特別科目等履修生対象集中講義「18歳からの実践日本語表現」シラバス

【科 目 名】 18歳からの実践日本語表現

【位 置 づ け】 全学共通履修科目（教養教育科目）

【開 講 主 体】 教養教育部門（高大連携推進委員会）

【授業担当者】 小倉斎、小林三太郎、外山敦子、入口愛、森本俊之、櫛井亜依

【授業の概要】

大学生になると学修環境や生活環境が大きく変化し、行動範囲や思考領域が急激に拡大・深化することになる。これに即応するため、複雑な思考を言語化する能力、多様な状況および相手に合わせたコミュニケーション能力の向上が求められている。では、実際の大学生活では、どんな場面でどのような表現技術が必要になるのだろうか。本科目では、こうした「18歳からの」日本語表現技術を、様々なシチュエーションを通して実践的に学修する。

【授業の目標】

1. 現在または将来の自分に必要な日本語の表現技術を知り、理解を深める。
2. 思考を言語化するための表現技術を身につける。
3. 相手や状況に応じた適切なコミュニケーションのための表現技術を身につける。

【授業計画】

※6人の担当者によるオムニバス形式とする。

第1回 導入編1 ガイダンス—大学での学びと日本語力—（小倉斎）

第2回 導入編2 キャリアにつながる日本語力①（小林三太郎）

第3回 導入編3 キャリアにつながる日本語力②（小林三太郎）

第4回 実践編1 「私」を語るための日本語力—1,000字分の自分を見つけよう—①（外山敦子）

第5回 実践編2 「私」を語るための日本語力—1,000字分の自分を見つけよう—②（外山敦子）

第6回 実践編3 「私」を語るための日本語力—1,000字分の自分を見つけよう—③（外山敦子）

第7回 実践編4 イメージを伝えるための日本語力—語彙を増やし使いこなそう—①（入口愛）

第8回 実践編5 イメージを伝えるための日本語力—語彙を増やし使いこなそう—②（入口愛）

第9回 実践編6 イメージを伝えるための日本語力—語彙を増やし使いこなそう—③（入口愛）

第10回 実践編7 説明のための日本語力—キャンパスガイドを作ろう—①（森本俊之）

第11回 実践編8 説明のための日本語力—キャンパスガイドを作ろう—②（森本俊之）

第12回 実践編9 説明のための日本語力—キャンパスガイドを作ろう—③（森本俊之）

第13回 実践編10 社会生活と日本語力—敬語コミュニケーション力を身につけよう—①（櫛井亜依）

第14回 実践編11 社会生活と日本語力—敬語コミュニケーション力を身につけよう—②（櫛井亜依）

第15回 実践編12 社会生活と日本語力—敬語コミュニケーション力を身につけよう—③（櫛井亜依）

【授業外学習の指示】 授業中に指示する。

【評価方法】 授業への参加状況、提出課題、リアクションペーパー等により、総合的に評価する。

【テキスト】 プリントを使用する。

【参考文献・資料】 授業中に紹介する。

2. 図書館との連携

2-1) 愛知淑徳大学図書館〈書評〉大賞

本賞は、①質量共に優れた本学の図書館資料をより有効に活用し、本学学生の文化的・知的活動の発展に寄与すること、②学生の批判能力・文章作成能力の向上を通して、本学の教育活動の質的充実に貢献することの2点を目的として、平成23年度に創設された。本事業は愛知淑徳大学図書館が主催し、全学日本語教育部門が運営に協力している。

2-1-1) 事業の概要

本賞は年2回（前後期各1回）開催され、本学のすべての正規学生（大学院生を含む）が応募できる。本学図書館所蔵の図書1冊に対し、1,200字程度の書評を応募要件に基づいて執筆するものである。

選考委員会は、図書館長（選考委員長）、全学日本語教育部門・文学部国文学科・人間情報学部・メディアプロデュース学部クリエティブライティングコースの各教員（1名）、その他（1名）の計6名によって組織されている。

賞の種類は、大賞（1編）、準大賞（1～2編）、佳作（数編）である。入選発表は、図書館内掲示板および図書館ウェブサイトにておこなわれ、受賞作品は、愛知淑徳大学図書館発行の広報誌『Lib.let』および図書館ウェブサイトで公開される。



図VIII-5 〈書評〉大賞作品募集チラシ(図書館作成)

平成25年度 後期 愛知淑徳大学図書館〈書評〉大賞					
学 部	学 科	専 修	専 攻	専 一	年
学部選択	氏 名				
選評表題	著 名				
著者名	出版社名				
著者記号	図書館	・ Toshio King			
著者名	発行年月日	年	月	日	
	チェック				

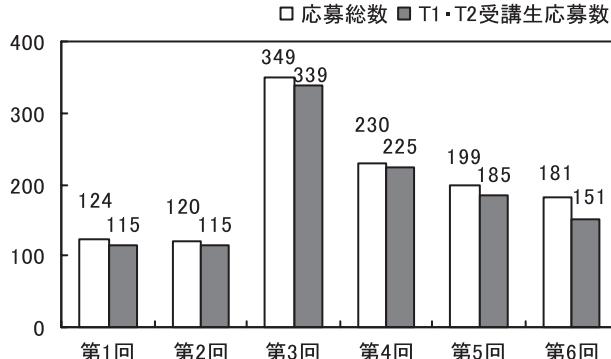
図VIII-6 〈書評〉大賞応募用紙(図書館作成)

2-1-2) 事業運営への協力

本事業の運営に際し、全学日本語教育部門が協力する業務は、以下の3点である。

- ① 日本語表現科目受講生への募集要項配付および作品応募の呼びかけ。
- ② 「日本語表現T1」「日本語表現T2」受講生応募作品の予備審査。
- ③ 選考委員（1名）の選任。

図VIII-7 からも明らかなように、本賞への応募者の9割は「日本語表現T1」ならびに「日本語表現T2」受講生である。そのため、同受講生の応募作品は、選考の前に6名の部門教員によって予備審査をおこない、本審査選考対象作品を、20作品程度まで絞り込んでいる。



図VIII-7 過去の応募総数およびT1・T2受講生応募数(件)



図VIII-8 部門教員による予備審査の様子

2-1-3) 受賞結果（平成23年度前期～平成25年度後期）

第1回(平成23年度前期)

種別	氏名	所属	書評タイトル(副題略)	書名(副題略)等
大賞	早川 元将	文学部国文学科2年	ミステリー維新	西尾維新『難民探偵』講談社 2009
準大賞	松原 久子	文学部国文学科4年	『言葉と物』に見られる文学的抒情性	ミシェル・フーコー『言葉と物』新潮社 1974
	加藤 朋子	メディアプロデュース学部2年	フロイトによる葛藤の意識	竹田青嗣、山竹伸二『フロイト思想を読む』NHK ブックス 2008
佳作	鈴木 一馬	文化創造学部4年	「喪失」の読み替え	レベッカ・ソルニット『災害ユートピア』亜紀書房 2010
	高須 多希	文学部国文学科1年	経済から見た教育格差	橋木俊詔『日本の教育格差』岩波新書 2010
	中榮 乃梨	文学部国文学科1年	家族との繋がり	伊坂幸太郎『重力ピエロ』新潮社 2003
	紀平 茜	文学部教育学科1年	ゆとり世代から見る「ゆとり教育」	諏訪哲二『なぜ勉強させるのか?』光文社新書 2007
	近藤 真衣	心理学部1年	知的生産のための必読書	外山滋比古『思考の整理学』ちくま文庫 1986
	松尾 玲那	メディアプロデュース学部1年	言語に潜む権力	ロラン・バール『文学の記号学』みすず書房 1998

第2回(平成23年度後期)

種別	氏名	所属	書評タイトル(副題略)	書名(副題略)等
大賞	辻 美里	文学部国文学科1年	“鬼”に呑まれた女、浄化へ導く男たち	夢枕獏『陰陽師 生成り姫』朝日新聞社 2000
準大賞	鈴木 一馬	文化創造学部4年	実践する批評	宇野常寛『リトル・ビーブルの時代』幻冬舎 2011
	中野 真紀	福祉貢献学部子ども福祉専攻1年	「退屈力」から得るもの	斎藤孝『退屈力』文藝春秋 2008
佳作	齋藤 陽	メディアプロデュース学部1年	閉ざされた空間が開かれるとき	ヴェロニック・ヴァスール『パリ・サンテ刑務所』集英社 2002
	江口 結美	交流文化学部1年	恐ろしき「魔王」	伊坂幸太郎『魔王』講談社 2005

▶ VIII 学内連携事業

第3回(平成 24 年度前期)

種別	氏名	所属	書評タイトル(副題略)	書名(副題略)等
大賞	該当なし			
準大賞	花井 美咲	文学部国文学科1年	生きていくということ	三田誠広『いちご同盟』河出書房出版 1990
	岡田 真奈	文学部教育学科1年	忘れられない記憶	佐野眞一『津波と原発』講談社 2011
	黒川 隼	心理学部1年	泥臭い「道徳」を教えてくれる本	灰谷健次郎『兎の眼(灰谷健次郎の本全集版 第1巻)』理論社 1987
	奥村 美里	メディアプロデュース学部3年	自殺という自然死	ショウペン・ハウエル『自殺について』PHP エディターズ・グループ 2009
佳作	石丸 由奈	心理学部1年	夜は短し、歩けよ乙女	森見登美彦『夜は短し、歩けよ乙女』角川書店 2006
	伊藤 駿作	交流文化学部3年	“考え直す”べき環境問題	池田清彦『環境問題のウソ』筑摩書房 2006
	浦野 那月	文学部国文学科4年	あなたが薦める一冊は?	テレビ東京報道局ワールドビジネスサテライト編『スマスの本棚』日経 BP 社 2011

第4回(平成 24 年度後期)

種別	氏名	所属	書評タイトル(副題略)	書名(副題略)等
大賞	辻 美里	文学部国文学科2年	“裏切り者”になれなかつた男	『新撰組 藤堂平助』文藝春秋 2007
準大賞	久納 美輝	メディアプロデュース学部1年	『幸福な死』から読み取れるカミュの世界観	カミュ『幸福な死』新潮社 2004
佳作	舟橋 彩乃	文学部国文学科1年	「戦争」の恐ろしさとは	加賀乙彦『帰らざる夏』講談社 1993
	森 緋都美	人間情報学部1年	言葉の裏に潜む姿	中島義道『私の嫌いな10の言葉』新潮社 2000
	鶴見 彩	福祉貢献学部社会福祉専攻1年	ほめて「縮む」教育	伊藤進『ほめるな』講談社 2005
	奥村 美里	メディアプロデュース学部3年	私はコウモリになれない	トマス・ネーゲル『コウモリであるとはどのようなことか』勁草書房 1989

第5回(平成 25 年度前期)

種別	氏名	所属	書評タイトル(副題略)	書名(副題略)等
大賞	富中 佑輔	文学部国文学科1年	デジタルな生物、その名は世界	福岡伸一『生物と無生物のあいだ』講談社 現代新書 2007
準大賞	辻 美里	文学部国文学科3年	御陵衛士という視点	木内昇『地虫鳴く』集英社文庫 2010
	高木 万葉	ビジネス学部3年	不条理に満ちた、この世に送る	アルベール・カミュ『異邦人』新潮社 1995
	山本 宗由	文化創造研究科博士前期課程1年	理想の図書館を求めて	根本彰『理想の図書館とは何か』ミネルヴァ書房 2011
佳作	榎原和佳奈	心理学部1年	性差の認知と受容	サイモン・バロン『共感する女脳、システム化する男脳』日本放送出版協会 2005
	水野 剛	ビジネス学部1年	村上春樹の世界	村上春樹『パン屋を襲う』新潮社 2013
	久納 美輝	メディアプロデュース学部2年	タイポグラフィとその奥にあるもの	『カミングス詩集』思潮社 1968
	小林 珠子	文学研究科博士前期課程2年	ことば+想像力=コミュニケーション	ヴォルフガング・イーザー『行為としての読書』岩波書店 1982
	水野有理香	文学研究科博士前期課程2年	常識とてきたものに対し、疑問を持つという視点	溝口睦子『アマテラスの誕生』岩波書店 2009
	白村麻紀子	文化創造研究科博士前期課程1年	短歌を読もう!	穂村弘、山田航『世界中が夕焼け』新潮社 2012

第6回(平成 25 年度後期)

種別	氏名	所属	書評タイトル(副題略)	書名(副題略)等
大賞	竹内 彩乃	文学部教育学科4年	哲学的思考による真理の追究	ヒューム『人性論』中公クラシックス 2010
準大賞	榎原和佳奈	心理学部1年	現代に甦るメドウーサたち	メリーリー・ヴァレンティスほか『女性・怒りが開く未来』現代書館 1996
	楠根 楓菜	メディアプロデュース学部2年	アランが語る戦争の命題	アラン『裁かれた戦争』小沢書店 1986
佳作	鈴木 孝典	文学部国文学科4年	黙って語ること	ヴァージニア・ウルフ『灯台へ』岩波文庫 2004
	秦 綾菜	メディアプロデュース学部1年	カラマーゾフ的な人びと	ドストエフスキイ『カラマーゾフの兄弟』光文社古典新訳文庫 2006
	久納 美輝	メディアプロデュース学部2年	詩的作用とそのアプローチ	池上嘉彦『詩学と文化記号論』筑摩書房 1983
	松原 由依	交流文化学部2年	“ストライクゾーン”から“色えんぴつ”へ	乙武洋匡『自分を愛する力』講談社現代新書 2013

2-1-4) 今後の課題

- 運営協力の立場から、今後の課題を3点挙げる。
- ① 現在、応募総数の大半を占める「日本語表現T1」「日本語表現T2」受講生による作品の質的充実をいかにして図るか。
 - ② 上記科目における指導内容と本賞とをどう関連づけるか。
 - ③ 上記科目受講後の継続応募にどうつなげるか。



図VIII-9 第1回〈書評〉大賞表彰式(H21.07.29)

2-2) 文献探索ミニ講座

2-2-1) 目的

1年後期開講科目「日本語表現T2」では、テーマの設定から完成までに必要なレポートライティング技術全般を学修し、4,000字のレポートを作成している（「II授業報告」参照）。このうち、講義第2週ではレポートテーマに関する基礎資料を収集するためのデータベース（Japan Knowledge、CiNii Articles、朝日新聞記事データベース蔵など）の使い方を学修し、実際に学生がデータベースを使用した文献リストの作成を課題として提示している。

しかし、授業中に検索実習をおこなう時間と場所が確保できないことから、データベースの使い方を熟知できず、十分に課題に取り組めない学生もいるのが現状であった。以前から、図書館でも学生の質問にはレファレンスデスクで対応してくれていたが、こうした学生が自発的に質問におもむくケースは極めてまれであり、学生がより気軽にデータベースの使い方を復習できる〈場〉が必要だった。

上記の問題解決のため、平成25年度後期に、図書館が開催する「図書館ミニ講座『20分でわかる！—はじめてのデータベース—』」において、本科目の学修サポートが試験的におこなわれた。本講座は、データベースを使って文献を検索し適切な資料入手できるようになることを目指し、データベース実習を中心にプログラムされた実践的な講座である。少人数で開講することで、習熟度に応じたサポートが提供できるというメリットがある。このように図書館の協力が得られたことで、これまでよりも丁寧な学修支援が可能になった。



図VIII-10 ミニ講座チラシ(図書館作成)

2-2-2) 概要

当該科目受講生対象の学修サポートは、データベースの使い方を学修する週を含む2週間（平成25年9月30日～10月11日）、図書館長久手本館および星が丘分館の各データベースコーナーにおいて、各館計10回実施された。

表VIII-3 H25後期ミニ講座日程表(本科目受講者対象期間)

9/30	10/1	10/2	10/3	10/4
CiNii	新聞	OPAC	Japan knowledge	CiNii
10/7	10/8	10/9	10/10	10/11
OPAC	Japan knowledge	CiNii	OPAC	Japan knowledge



図VIII-11 図書館データベースコーナー

内容は、①各種データベースを使った検索方法、②検索結果の見方、③文献リストの書き方である。従来の「ミニ講座」でおこなわれていた上記①②に、日本語表現受講生向けに③が追加されている。講座は図書館スタッフが作成した資料（図VIII-12）に基づき、実際にデータベース端末を使用した実習もおこなわれる。所要時間は約20分、1回の講座につき定員4名程度の少人数で実施している。

2-2-3) 利用状況およびアンケート結果

2週間おこなわれた本講座の利用者は、両館合わせて19名であった。講座終了後に実施したアンケート結果は表VIII-4のとおりである。

表VIII-4 アンケート結果(回答数6、学科内訳:国文・英文・メデプロ 各1、不明 3)

質問1：本講座を利用する理由（選択式・複数回答可）	回答数
検索結果の見方や文献リストの書き方が分からなかつたから	3
データベースの使い方が分からなかつたから	2
自分で検索した際、有益な検索結果が得られなかつたから	1
使用するデータベースの種類が分からなかつたから	0
その他	0
質問2：本講座を受講し、上記の問題は解決したか（選択式）	



図VIII-12 ミニ講座配付資料(図書館作成)

解決した	6
解決しなかった	0
質問3：感想（記述式）	
<p>➤ 自分では分からなかったと思うので、この講座を受けて良かったです。ありがとうございました。寧ろ、この講座を受けないと論文を探すことはできないと思いました。（国文）</p> <p>➤ とても丁寧で親切でした。（英文）</p> <p>➤ 短い時間で2コマ教えてもらえたのでよかったです。（メデプロ）</p> <p>➤ とても丁寧に教えていただき、わかりやすかったです。（学科未回答）</p> <p>➤ 分かりやすいプリントを頂き、丁寧に説明してくださったので分かりやすかったです。巻の見方の間違いにも気づけたのでよかったです。（学科未回答）</p> <p>➤ 丁寧に教えてくださったため、よく理解できました。（学科未回答）</p>	

アンケート結果から、学生が課題作成時に抱えた問題を、ミニ講座を受講することで解決できたことが分かる。また、少人数での開講が功を奏し、個別かつ丁寧な学修サポートを受けられたことに対する満足度が大きかったことも明らかになった。

2-2-4) 成果および今後の課題

今回図書館の協力を得られたことで、個々の学生に対してより具体的で細やかな学修支援を実現できたことが最も大きな成果である。また、図書館内で実施されている講座を活用することで、学生がレファレンスサービスに触れるきっかけを提供できたことも、収穫のひとつであるといえよう。

一方、課題としては、講座に参加した学生的満足度は高いが、講座を利用する学生がまだごくわずかであるということだ。次年度以降は、講座の利用者数の増加をめざしたい。また、講座内容についても文献の検索方法・手順だけでなく、検索過程で学生が抱える問題（検索キーワードの選択等）を解決するための支援まで広げることが可能であるか、再検討したい。



図VIII-13 収集した資料を確認しあう受講生

2-3) 授業サポート

平成22年度の「日本語表現T2」開講以後、履修者の急増により、文献検索データベースが特定の時間帯に利用が集中したためアクセス制限数をオーバーしたり、特定の図書館蔵書に利用が集中したりするケースが想定された。そこで図書館には下記のとおり、授業

運営に下記の支援を要請した。

2-3-1) 概要

図書館による「日本語表現 T2」への支援は、以下の3点である。

- ① 授業用指定図書を300冊程度排架（図VIII-14）。
- ② 本学OPACで指定図書一覧を公開（図VIII-15、16）。
- ③ 以下のデータベースのアクセス制限数の増加。

➤ Japan Knowledge

平成21年度まで アクセス数2
→平成22年度 アクセス数10
→平成24年度 アクセス数無制限

➤ 朝日新聞オンライン記事データベース 蔵書II ビジュアル

平成23年度まで アクセス数2
→平成24年度 アクセス数50（期間限定）



図VIII-14 日本語表現専用指定図書コーナー



図VIII-15 OPAC 指定図書テーマ別一覧

図VIII-16 OPAC テーマ別指定図書(テーマ:憲法改正)

2-3-2) 成果

図書館の協力で、通常の授業科目よりも多くを指定図書として確保できるようになり、一部の学生による資料の占有などのトラブルが解消された。また、各種データベースのアクセス制限数の増加によって、データベースに接続できないなどの問題もほぼ解消した。開講規模にふさわしい学修環境を整備でき、授業運営が円滑になったばかりでなく、その後の学生の図書館利用率、データベース利用率も向上するという効果もたらしているようである。

3. 大学院との連携

3-1) ライティング科目の開設

3-1-1) 目的

大学院学生には、学位論文執筆のための高度な学術的文章作成技術と将来教育現場に携わる者としての文章指導力とを身につけることが求められ、さらに、身につけた力を実践する経験をも必要とされる。

本部門は、学術的文章を書く技能ならびにその指導法の両者を関連づけながら学修することで、研究能力と教育能力双方のレベル向上を目指したライティング科目の開講を、一部の研究科に提案した。また、科目開講主体の研究科から依頼を受け、講義内容の策定および授業を部門教員が担当している。

3-1-2) 科目名および位置づけ

文化創造研究科文化創造専攻国文学領域科目ならびに文学研究科文学専攻国文学コース科目として開講し、他研究科からの履修も奨励する。

表VIII-5 大学院生対象ライティング科目の位置づけ

科目名 (*は文研科目名)	必選 の別	単位	履修 年次	開講期	担当者	備考
文化論特殊講義 I (特論A) *特殊研究 I (国文学特論) a	選択	2	1・2	前期	外山敦子	H25～開講 *文研開設科目は H24～
文化論特殊講義 II (特論B) *特殊研究 I (国文学特論) b	選択	2	1・2	後期	小倉 齊	

3-1-3) 単位修得者の人材活用

本科目の単位修得者のうち適任者を、全学共通履修科目「日本語表現 T1」・「日本語表現 T2」受講生の学修をサポートするチューターとして採用する(「V 学修支援」参照)。さらに、チューターとして指導経験を積んだ大学院学生が、将来的には、「日本語表現 T1」・「日本語表現 T2」の担当教員採用候補者となりうるような科目として成立するよう、授業内容・教育内容の充実を図る。

3-1-4) 期待できる教育効果

科目開設により、以下の2点が期待できる。

- ① 文章作成法と文章指導法とを関連づけた授業で、研究能力と教育能力双方に優れた人材を育成することができる。
- ② チューターとして実際に学部学生の指導に携わった場合は、理論と実践との相乗効果により、本人の研究教育能力の一層の向上が期待できる。

3-2) 「文化論特殊講義 I (特論A)」実施報告

3-2-1) 概要

論理的で明快な学術的文章を書くための技能と理論とを、実践的に修得する。具体的には、1回ごとに1つの技能または1つのライティング・プロセスを扱い、①技能に関する説明と練習、②課題文作成、③履修生相互で文章を読み合い意見交換をするピア・レスポンス方式を採用した批評、という3ステップで授業を展開する。その成果として、学位論文の執筆に堪えうる高度な文章作成技術並びに将来教育現場に携わる者としての文章指導技術を修得する。

3-2-2) 授業計画

15回を前半と後半の2期に分け、2種類の課題に取り組む(表VIII-6)。前半は、各自の研究テーマにおける先行研究を整理する。また、その過程で、自分の研究テーマに最も近い研究書の書評を書き、任意で「愛知淑徳大学図書館〈書評〉大賞」に投稿している。

後半は、先行研究の問題点を明らかにした上で研究目的を作成する。課題はいずれも、レジュメを準備しての口述発表→草稿→完成稿という3段階を経て提出する。

3-2-3) 学修の特色

本科目における学修の最大の特色は、多様な専門領域の学生が履修していることそのものにあるといえる。

優れた研究として評価されるためには、自分が手がける研究の意義や目的を、同じ専門領域の研究者は言うまでもなく、異なる研究領域の人に対しても正確にかつ分かりやすく伝える文章力が不可欠である。

この授業の履修生は表VIII-7のように専門分野が多岐にわたっているが、受講生はそれぞれの専門分野に精通している必要はなく、「書かれ方」に着目することで、おのずと「書かれた内容」の不備や不足を見いだすことができる。例えば、説明不足による論理の飛躍は、不足情報を自分の知識で補いながら読んでしまう同分野の読み手よりも、専門知識に精通していない異分野の読み手の方が気づきやすい。つまり、「どのように書かれているか」に

表VIII-6 平成25年度授業計画

回	授業計画	課題の内容
第1回	オリエンテーション	—
第2回	学術的文章の特徴を理解する	〈課題〉 先行研究の整理 (完成稿1,200字) ①口頭発表 ②草稿批評 ③完成稿作成
第3回	ことばを厳密に使う	
第4回	一文一義で書く	
第5回	パラグラフをつくる	
第6回	パラグラフをつなぐ	
第7回	「私語り」を削る	
第8回	課題①の完成・批評	
第9回	マップで研究の構想を練る	〈課題〉 研究目的の執筆 (完成稿2,000字) ①マップ作成 ②口頭発表 ③草稿批評 ④完成稿作成
第10回	先行研究を整理する	
第11回	目標規定文をつくる	
第12回	論拠の妥当性を確認する	
第13回	論文を適切な方法で引用する	
第14回	参考文献を示す	
第15回	課題②の完成・批評	

注意を払うことによって、「書かれた内容」のさらなる精選を目指している。

つまりこの授業では、多様な専門分野から成る受講生集団が、それぞれ優れた「読み手」としての機能を果たしているのである。

表VIII-7 受講生の所属内訳(平成24・25年度)

開講年度	受講人数	所属内訳（カッコ内は人数）
H24	9	文学研究科国文学コース（5） 文学部英文学科（1） コミュニケーション学部コミュニケーション心理学科（3）
H25	5	文学研究科国文学コース（2） 文化創造研究科国文学領域（1） 文化創造研究科クリエイティブライティング領域（1） 文化創造研究科図書館情報学領域（1）

3-2-4) 学修の成果

前半の課題作成の過程で挑戦した「平成25年度前期 愛知淑徳大学図書館〈書評〉大賞」は、1人が準大賞を、3人が佳作を受賞し、応募した4人全員が入賞するという成果を挙げた。

また、通常の授業のなかでは、ピア・レスポンスを15回繰り返したことで、文章の問題点を的確に指摘できるようになってきた。もちろん、他者の問題点を発見する力がついたところで、即座に文章の上達に結びつくわけではないが、優れた学術論文を作成するための第一ステップは達成し得たものと考える。

3-3) 「文化論特殊講義Ⅱ（特論B）」実施報告

前期開講の「文化論特殊講義I（特論A）」の後継科目として開講。論理的で明快な学術的文章を書く力を身につけていることを前提に、学術論文執筆のための高度な技術と理論を実践的に修得することを目標として授業を展開した。受講生が少ないため、ほぼマンツーマンで授業をおこない、受講生は書き、授業担当者は添削し、議論を重ね、書き直す、ということの繰り返しで、ハードな内容の15回であった。参考までに、シラバス（表VIII-8）と受講者のレポート（一部抜粋）を示しておく。

表VIII-8 「文化論特殊講義Ⅱ(特論B)」シラバス

【授業の概要】

講義を中心としつつも、適宜演習を加えた授業形態とする。論理的で明快な学術的文章を書く能力を身につけていることを前提に、より高度な学術論文執筆・作成のための方法、技術及び理論を実践的に習得する。具体的には、方法に関する理論の紹介、方法についての実践、履修者同士の相互批評を繰り返すことで、学術論文執筆につながる高度な学術的文章作成技術を身につける。

【授業の目標】

論理的で明快な学術的文章を書く力を身につけていることを前提に、学術論文執筆のための高度な技術と理論を実践的に修得する。

【授業計画】

- | | | |
|------|------------------|---|
| 第1回 | イントロダクション① | ①学術論文とは何か ②日常生活に応用可能な論文 ③自分の頭で考える |
| 第2回 | イントロダクション② | ①問題を立てる ②未知に対する問い合わせ ③良い論文、面白い論文の条件 |
| 第3回 | 問題の立て方① | ①比較から生まれる問い合わせ ②類似性と差異性の把握 ③問い合わせの発見 ④差異・類似の分類 |
| 第4回 | 問題の立て方② | ①仮説による問題の検討 ②新たな問い合わせの発想と見立て ③複数の専門分野・領域の必要性 |
| 第5回 | アウトラインを考える | |
| 第6回 | 資料を集め① | ①資料・参考文献をどこで探すか ②テーマを絞る ③一次資料と二次資料 ④資料の分類 |
| 第7回 | 資料を集め② | ①仮説に反する資料の扱い ②資料とオリジナリティ ③再現性の確保
④テクスト・クリティーク ⑤図式化 |
| 第8回 | 論文の構成①—序論を書く(1)— | ①論文の各部分の割合 ②読者を意識する ③問い合わせの正当化 ④本論のプログラムと方法の説明 |
| 第9回 | 論文の構成②—序論を書く(2)— | ①序論の相互批評 ②序論の書き直し |
| 第10回 | 論文の構成③—本論を書く(1)— | ①問い合わせ(クエスチョン)の分割 ②連鎖式か、並列式か、弁証法か? |
| 第11回 | 論文の構成④—本論を書く(2)— | ①各章内部の検討 ②先行研究、他者の意見収集としての資料分析 |
| 第12回 | 論文の構成⑤—本論を書く(3)— | ①専攻する意見の代替としての反論 ②前提を崩す ③常識からの解放 ④結論を急がない |
| 第13回 | 論文の構成⑥—結論を書く— | ①望ましい結論 ②結論は短く単純に ③論文執筆のタイミング ④論文の組み立て方 |
| 第14回 | 論文の構成⑦ | ①論題をつけ、要旨を書く ②論文の評価 |
| 第15回 | 授業のまとめ | 研究・論文計画書の完成 |

【授業外学習の指示】

授業計画に基づき、各回の授業範囲を予習し、専門用語の意味や概念について、理解を深めておく。

【評価方法】

授業への参加状況、発表内容や質疑応答の様子、レポートの内容などにより、総合的に評価する。

【テキスト】

適宜、プリントを配付する。

【参考文献・資料】

これから研究を書くひとのためのガイドブック (佐渡島紗織・吉野亜矢子 ひつじ書房)

「文化論特殊講義Ⅱ（特論B）」受講生のレポート（一部抜粋）
修士論文序文 推敲（2013年1月23日提出）

序章

はじめに

—〈怪談〉が意味してきたものをめぐって—

妖怪や幽霊などの「異なるもの」や「怪なるもの」、そしてそれに付随する恐怖は古代から現代にいたるまで、様々な文学作品に登場してきた。作品中に描かれる「異なるもの」、「怪なるもの」を通時に見ると、普遍的なもの¹、月日を経るにつれてかたちを変えたもの²、また、新たに登場するもの³などがある。そして、言うまでもなく、作品の受容者も時を経るごとに変化している。

古くは、「異なるもの」や「怪なるもの」を説明するために、特別な根拠が示されないまま、妖怪や幽霊、怨霊の仕業であると解釈された。しかし現代のような、合理的と言わわれている時代⁴においては、様々な学問の進展により、その正体を説明するための一応の材料がそろっている。心理学や精神分析学、医学や哲学などを根拠として、「異なるもの」「怪なるもの」の原因を、病気や無意識、精神に起因するものとして認識しようとする。

しかし「異なるもの」「怪なるもの」に一応の論理づけができるようになった今日においても、妖怪や幽霊をはじめとする「異形」「人外」はたえず文学作品に登場し、人々の興味を引いてやまない。合理的な時代であるはずなのに、依然として人は不合理なものを見出せたがる。不合理なものへの興味関心は肥大増幅するばかりである。

文学研究において、怪異、怪談、怪奇、ホラーなどを扱うとして書かれた論文はいくつか存在する。しかしこれらの枠組みは曖昧で、語の統一も図られないままである曖昧ながらも語は統一されていない。そして、それぞれの語の定義にしても、研究者間での共通認識に支えられているとは言い難い。先行する論文では、研究者の間で定義や語が統一されていないことからも分かるように、研究者の私見に依った則ったものが多い。つまり、扱う作品があるジャンル—ここでは怪談文学作品だが一に属しているという前提で話を進めながらも、その定義は明確に示されてこなかつた。定義が明確に示されないまま、自らが扱っている作品群は、間違いなく同じ系統に属するという独見では、新たな議論に発展しにくい。扱う作品のジャンルの明確な定義を示さないままながら、自らが論じている作品は間違いなく同じ系統に属するという独見では、新たな議論に発展しにくい。先行する「怪談文学史」研究がめざましい特筆すべき成果をあげていないのも、主に「怪談文学史」などといわれる、文学史的な観点から「異なるもの」「怪なるもの」を扱おうとする先行論文には大きな問題点があるのも、定義・語義についての議論がなされていないことに起因する。

江戸川乱歩は「怪談入門」⁵『幻影城』において、「怪談」を分類している。乱歩は分類方法について「テーマの部類分け」であるとあらかじめことわっている。乱歩がいう

コメント [h1]:

黒色：推敲 1・2
茶色：推敲 3 (20121205)
赤色：推敲 4 (20121212)
紺色：推敲 5 (20121212)
緑色：推敲 7 (20130109)
紫色：推敲 8 (20130116)
橙色：推敲 9 (20130123)

コメント [h2]: 古典的な妖怪や幽霊。ex. 河童、足のない幽霊。『百鬼夜行絵巻』、あるいは江戸時代の歌舞伎・浮世絵などの影響も強く残る。

コメント [h3]: 普遍的なものが変化したり、新たに意味が加えられたりしたもの。

コメント [h4]: 時代の変化とともに新たに登場する妖怪や幽霊。ex. 科学技術の発展とともに新展開をみせるSF作品。あるいは「リング」などの新たなメディアとともに登場した妖怪・幽霊の類。

コメント [h5]: ※「合理的時代」と断定するのを避けたのは、現在私たちが合理的だと考えている医療等の学問が、後の時代にあっては幻想に過ぎないものとなる可能性が否定できないからである。

コメント [h6]: ※「怪談」でも、①日本の古典的な怪談のこと、②「怪」を「談ずる」=怪談とするもの、③怖い話や不思議な話全般を指すもの、というように一つの語がひとつの意味を表すことさえ危うい。

コメント [h7]: ※乱歩が『幻影城』において使用する「怪談」という語は、③怖い話や不思議な話全般であると考えられる。

「テーマ」は作品に登場するお化けの分類、あるいは作品にあらわれる怪異の分類に過ぎない。つまり、このようなテーマ分類の中では、どのような「怪」・「異」の現象があらわれているかということのみが問題となる。そのため、それぞれの作品にどのような言説が用いられているかということに関係なく、テーマが分類されてしまうのである。いようと、ここで行われている分類には関係しないのである。そこに恐怖が伴うかどうかや、どのような表現によってなされたかなどは問われず分類されている。このような分類こののようなテーマの部類分けに至った原因理由として、乱歩がセイヤーズが作成した怪談分類を参考しながら参考にしつつ、それに対するかたちで、自らが考える怪談の分類を行ったという可能性が想定されるものが考えられる。セイヤーズの分類が、まさにテーマ別で行われたことものだったからである。

乱歩による怪談分類の問題点は他ほかにもある。そもそも、セイヤーズが分類しようとして持ち出したものは一般的に言いう「怖い話」や「不思議な出来事」などの、広義の「怪談」である。しかし日本で「怪談」という言葉が使われるとき、その意味は必ずしも広義の怪談を意味しない。『四谷怪談』をはじめとする古典的な怪談や、「怪」を「談ずる」ことそのものを指して怪談と呼ぶような、狭義の怪談がいくつか存在する。乱歩はセイヤーズの分類に則って、日本で多義的に使用される「怪談」という語を、広義の「怖い話」、「不思議な出来事」という意味でのみ使用している。

乱歩は分類をするうえで「怪談」という語を用いるべきではなかった。乱歩が分類の中で「怪談」という語を使用することによって、様々な問題が顕在化することになったあらわれている。「怪談」という語が何を意味するかがという点において曖昧化されなままでいる。また、作品の表面のみを見て、「怪談」であると決めつけていると名付けている点で恣意的な単純化が図られている。乱歩の怪談分類であらわれている問題は、今日の怪談文学研究が直面するにあらわれている問題と同質なのである全く同じなのである。

注

¹ 古典的な妖怪や幽霊。ex 『百鬼夜行絵巻』、あるいは江戸時代の歌舞伎・浮世絵などの影響も強く残る。

² 注1で示したような「普遍的なもの」が変化したり、新たに意味が加えられたりしたもの。

³ 時代の変化とともに新たに登場する妖怪や幽霊。例えば科学技術の発展とともに新展開をみせるSF作品のこと。あるいは「リング」などの新たなメディアとともに登場した妖怪・幽霊の類。

⁴ 「合理的時代」と断定するのを避けたのは、現在私たちが合理的だと考えている医学や心理学などの学問が、後の時代にとっては幻想に過ぎないものとなる可能性が否定できないからである。

⁵ 江戸川乱歩「怪談入門」(『宝石』、1948年6月～1949年7月連載)

コメント [h8]: ドロシー・L・セイヤーズ
(Dorothy Leigh Sayers) 1893-1957: 英国の推理作家。

コメント [h9]: 『探偵怪奇恐怖小説集』、原題等 : Dorothy L. Sayers (ed.), «Great Short Stories of Detection, Mystery and Horror» (Victor Gollancz, 1928)